

平等な社会へ

(原文)

須江 優輝 (13 歳)

東京都

東京都立大泉高等学校附属中学校

数年前、私はとても衝撃的な現場を目にしました。その日、私はコンビニに立ち寄っていたのですが、突如後ろから怒鳴り声がしました。とっさに後ろを振り返ってみると、店長と書かれた名札を付けている人が、店員の若い黒人男性を怒鳴りつけていました。その内容は、最初は「何度言ったらわかるんだ」といった説教だったのですが、途中から、「これだから黒人は使えない」という黒人の否定をだしました。私は嫌な気分になってすぐに店を出てしまいましたが、今考えてみると黒人だから、という理由で勝手に使えないと決めつけ、さらにその考えを押し付けて説教したことは到底許されることではないと思う。

また、この逆の場合もあります。

私が小学生だったころ、ある一人の転校生がやってきました。その子は、目に生まれつきの障害を持っていて、目が見えにくいとのことでした。私たちクラスメイトはその子が傷つかないように最大限気を使って接しました。例えば、何かにぶつかったりしないように移動する時はみんなでサポートしたり、ドッチボールで狙わないようにしたりしました。その子が転校してきて少ししたある日、国語の授業で友だちへの思いを書こうという作文がありました。その時にその子が書いた作文は衝撃的でした。その内容とは、「今までいろいろな面倒をみてくれてとてもうれしかった。確かに私は障害を持っていてみんなとは同じように生活したり、運動したりできないかもしれない。けれども私はみんなと同じように接して欲しい」というものでした。そこで私たちはその子のことを私たちとは違う存在と認識して、特別視していたことに気が付きました。その作文の後、私はその子への接し方を改め、「普通」の友だち、「普通」のクラスメイトとして過ごしました。

今現在、黒人は黒人で私たちとは違う存在。障害を持っている人は障害を持っている人で私たちとは違う存在、と決めつけて勝手に差別したり、逆に特別視して迷惑をかけていました。果たしてこれは平和と呼べるだろうか。私たちにとっては何ら不自由のない平和な世界かもしれないと思います。けれど差別されたり、特別視されている人たちにとっては、平穏な気持ちで暮らせず、平和ではないと感じているかもしれません。だから、だれもが差別も特別視もされない平和な世界を未来で実現するために、私たちは、人々はみな同じ存在であり、平等であるということを理解して、それを日本だけでなく、全世界に広げられるように努力していきたいと思う。